アスファルトの虎（タイガー）

滾（たぎ）る肉体の受難曲（ラプソディ）

PART IX

大藪春彦

KADOKAWA NOVELS

苛酷な条件のなか、次々と新記録（コース・レコード）を樹立する
高見沢のもとに届いた急報（ビッグ・ニュース）とは?!
超絶パワーの**本格ハードボイルド**

角川書店

アスファルトの虎（タイガー）

滾る肉体の受難曲

PART IX

大藪春彦

业学院图书馆
书章

KADOKAWA NOVELS

苛酷な条件のなか、次々と新記録（コース・レコード）を樹立する
高見沢のもとに届いた急報（ビッグ・ニュース）とは?!
超絶パワーの**本格ハードボイルド**

角川書店

KADOKAWA NOVELS

●作者のことば

射撃も猟もオート・スポーツも、ギリギリの実力と駆引きで争うストイックな競技である。瞬間に相手の能力を読み、イチかバチかで何ミリを争い、コンマ以下の秒を競う。そこには耐えて耐えぬいたものが爆発し、再び「静」の世界に戻ってゆく美しさがある。僕はこの美しさ——すなわちストイシズムの美学をこの物語に描いているつもりだ。

略歴＝一九三五年生まれ。香川県出身。早大中退。アクション・ノベルの巨星として君臨、他者の追随を許さない。

¥760円)

1810-6 C0293 P760E

カドカワノベルズ

平成二年十一月二十五日初版発行

著　者　大藪春彦（おおやぶはるひこ）
発行者　角川春樹

アスファルトの虎（タイガー）PART IX

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二-一三　振替東京三-一九五二〇八
〒一〇二　電話　営業〇三-八一七-八五三一　編集〇三-八一七-八四五一

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-771810-6　C0293

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

KADOKAWA NOVELS

アスファルトの虎 PART IX

滾(たぎ)る肉体の受難曲(パッション)

大藪春彦

カバー絵／辰巳四郎
本文イラスト／谷口　茂

アスファルトの虎（タイガー）　ＰＡＲＴⅨ　目次

山岳猟　11
タフなグリズリー　40
南フランスに　70
ポール・リカール・サーキット　101
荒天下のテスト　132

酒とバラの日々　164
別　れ　195
スターライト・スコープ　226
再び南アフリカに　257

前回までのあらすじ

F1レースのチャンピオンを目指す高見沢優は、英国のマクラーレン・チームに所属している。射撃にも抜群の技倆を誇る彼は、アフリカやモンゴルでの狩猟行も経験している。一方でその実力を買われ目黒の闇将軍田口元首相のボディ・ガード軍団から狙撃者というやばい、だが実入りのいい仕事も受けている。上流階級の女性達を顧客とした男妾稼業も収入源である。

その年の正月早々に高見沢はマネージャーの浅見を同道して、ロンドン経由で南米リオ・デ・ジャネイロへ行った。このサーキットでF1レース合同テストが行われるのだ。灼熱のサーキットではマシーンにもトラブルが続出したが、高見沢は本番さながらの走行が出来るほどにマシーンに習熟していった。テスト終了で一旦ロンドンに戻ったが、高見沢は既にブラジルで申し込んでおいたカナディアン・ロッキーでの狩猟のため、単身大西洋を飛び越えた。

ロッキー山脈の山間で高見沢は、ガイドのジェリーやハンティング・ガイドのジミー、ディックらの歓迎を受ける。その夜は銃の手入れなどで過ごし、早朝五時に起床、ディック、ジミー、高見沢と馬を並べて、初日の目標エルクを求める。高見沢はついている。エルクも、翌日のミュール鹿も素晴らしい獲物だった。前進キャンプへ移動して探し求めた大ヘラ鹿も一弾で仕留め、その立派な掌角を測定してみると、今迄の記録を凌駕するものであった。

高見沢が次に狙ったのはマウンテン・キャリブーである。彼の獲物は体重二百キロを越え、角も記録の上位にランクされるものだった。さらにストーン・シープを求めて、高見沢とガイド達は雪に覆われた原野を行く。優れた角を持つシープを発見した。明日はその一頭を追いかけることになるだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

山岳猟

翌朝、高見沢優は、点灯されたコールマンのガソリン・ランターンの灯りと、スキニーが動きまわる気配で目覚めた。

だが、スリーピング・バッグの温もりが愛しいので、目を閉じたまま動かない。うとうとした。

やがて、ベーコンが炙られる芳香で完全に目を覚ました。アブラシヴ・ウールの下着をつけている高見沢はスリーピング・バッグから脱け出る。

すでに重油ストーヴはゴーゴーと音を立てていた。高見沢が腕時計をみると、午前五時頃だ。

「グッド・モーニング、お客人」

ストーヴのそばのスキニーが声を掛けてきた。

「モーニン、スキニー」

高見沢は笑顔を返した。ペンドルトンのウール・ウェスターン・シャツとフィルスンのウール・ホイップコードのバック・パッカー・パンツ、それにエディ・バウアーのダウン・ヴェストとパイオニーアのダウン・ジャケットをつける。

シルクのインナーソックスとウールのソックスをつけ、ハーマンのインシュレーテッド・ハンティング・ブーツを履く。

ジミーとディックも起き出してきた。高見沢と朝の挨拶を交す。

高見沢が歯ブラシに歯磨きクリームを盛り上げていると、スキニーが、

「水なら、さっき泉から汲んできたばかりのやつがそこにありますよ」

と、テントの入口近くの大きなバケツを示した。

「サンクス」

高見沢はシエラ・カップにその水を入れた。カップと歯ブラシを持ってテントから出る。
外はまだ暗い。もっとも月明りと星明りが雪に反射して、足許がまったく見えぬほどではないが。
テントから十メーターほど離れた高見沢は、一度シエラ・カップを雪上に置き、一メーターほど移動してから勢いよく放尿する。
放尿を終ると、カップを置いてあったところに戻り、左手でカップを持って歯を磨く。カップの水で口をすすぐと、その冷たさが歯茎にしみた。
カップに残った水で歯ブラシを洗い、その水を捨てる。テントに戻る時、テントから出てきたジミーとすれちがう。
テントに戻った高見沢は、空になっていたシエラ・カップにもう一度バケツの水を汲み、その水を使って目のまわりを洗った。その水をテントの外に捨てる。

組立て式テーブルを囲んだキャンヴァス・チェイアの一つに高見沢が腰を降ろしてタバコに火をつけると、インスタント・パン・ケーキを焼いていたスキニーが、マルチ・ヴィタミン強化と袋に印刷されたインスタント粉末ジュースを大きなジャグに入れ、水を注いで長いスティックで掻きまわした。
そのジャグを高見沢の前に置く。高見沢はジャグからシエラ・カップに移したオレンジ・ジュースを、口のなかで暖めながら飲んだり、タバコを吸ったりする。
ジミーとディックがテントのなかに戻ってきた。キャンヴァス・チェイアに腰を降ろし、インスタント・オレンジ・ジュースを飲む。
パン・ケーキを十数枚焼き終えたスキニーは、フライパンでフランクフルト・ソーセージをいためはじめた。その一方で、メープル・シロップを

入れた小さな鍋をストーヴに掛ける。
やがて朝食が出来あがった。寒さに耐えるために、高見沢もパン・ケーキにバターをこってりと塗り、熱いメープル・シロップをたっぷりと掛けて食う。
食事をしているあいだに、ストーヴに掛けたヤカンの口から湯気が吹きあがった。
朝食を終えたスキニーは、高見沢たちにインスタント・コーヒーを淹れ、
「じゃあ、出猟の準備をしてきますから」
と、テーブルを離れた。まず高見沢の鞍と鞍の下に敷くフェルトをかついでテントを出ていく。
高見沢はコーヒーに、砂糖とクリーム・パウダーをたっぷり入れてゆっくり飲んだ。便意をもよおす。残ったコーヒーをいそいで飲み干すと、トイレット・ペーパーを一メーター分ほど引き切って丸め、ダウン・ジャケットのポケットに突っこんだ。シエラ・カップにヤカンの湯を注ぎ、そのなかに皮膚清浄綿の「リンスキンL」のパックを突っこんで暖めた。
湯から「リンスキンL」のパックを引きだして水分をトイレット・ペーパーの一部で拭い、ペンドルトンのシャツの胸ポケットに入れた。
「ちょっと失礼」
とジミーたちに言い、簡易トイレの三角テントに向う。コールマンのランターンの灯のそばで、スキニーが栗毛の馬に鞍をつける作業をしているのが見える。
トイレ・テントのなかでは灯油ランプが点灯されている。排尿と排便を済ませた高見沢は、肛門部をトイレット・ペーパーで拭っただけでなく、パックを破って取出した「リンスキンL」でもよく拭う。
テントに戻ると、シエラ・カップに入っていた

湯をテントの外に捨て、そのカップを持ってテーブルのところのキャンヴァス・チェイアに腰を降ろした。

スキニーがテントに入ってきて、今度はジミーの鞍とフェルトを運び出す。高見沢に二杯目のコーヒーを淹れたディックが、トイレット・ペーパーを破ってダウン・コートのポケットに入れ、黙ってテントを出ていく。

高見沢はコーヒーを飲みながら、タバコを深々と吸った。テントに戻ってきたディックと入れ替りに、切り離したトイレット・ペーパーを丸めたジミーがテントを出ていく。

スキニーがまたテントに入ってきて、ディックの鞍とフェルトを運び出した。五分ほどしてジミーがテントに戻ってきた。

しばらくして、スキニーがまたテントのなかに戻ってきた。大きな麻袋の中からキャンデー・バーを両手ですくい出してテーブルの上に移すことを三回くり返し、

「昼食はこれで我慢してください」

と、言う。三枚の新聞紙もテーブルに置いた。

高見沢たちは、簡易ベッドの下からバック・パックを取出し、新聞紙に包んだキャンデー・バーをバック・パックのなかに突っこむ。高見沢はダウン・オーヴァー・パンツをつけた。

スキニーをのぞく三人は、ウールのハンティング・グラヴをつけた。バック・パックを背負って外に出る。スキニーも出た。

外はまだ暗かった。それでも、月明りと星明りのせいで、近くの物の輪郭が分らぬほどではない。

今日の猟に使う四頭の馬のそばには、雪上でガソリン・ランターンが輝いていた。

高見沢とジミーはテントに立てかけてあるそれぞれのライフル、ディックは斧を手にした。

高見沢は自分の栗毛につけられたスキャバードに、口径・308ノーマ・マグナムのライフルを突っこみ、大きなスナップ・ボタンで留めた。鞍にまたがり、左手で手綱を握ると、鞍とその下のフエルトのあいだに先端を突っこまれていたヤナギの枝の鞭を右手にした。スキニーがその馬の足を縛ってあったロープをほどく。

やがて、ディックを先頭にし、真ん中に高見沢、しんがりに荷馬を曳いた騎馬の一行はテントの近くを離れた。

南西に進路をとって盆地を抜けると、南のほうにジャック・パインのケモノ道を進む。馬が通れない木が立ちふさがると、ディックが馬から降りて、その木を斧で切り倒す。そんなことがしばしば続いた。

八時半頃になって、北国の冬の太陽が東のほうから空を白くした。九時頃、太陽が完全に顔を見せた頃、一行は馬に乗ったまま山を登りはじめていた。男たちは馬に鞭をくれる。

馬たちは喘ぎ、吐く荒い息が水蒸気のようになる。ジャック・パインの林はドワーフ・ウィローの灌木地帯に変った。

午前十時頃、ドワーフ・ウィローの灌木が尽きるあたりに来た。その先は急な登りだ。

ディックが馬から降りて、馬をドワーフ・ウィローの幹につなぐ。スキャバードから斧を抜いて腰のベルトに差す。

高見沢も馬を降りた。馬をドワーフ・ウィローにつなぎ、スキャバードから抜いたライフルの安全装置を外した。

遊底を引いてみて弾倉に装塡されていることを確かめ、弾倉の実包群を左手で下に押さえつけておき、その上を滑らせて前進させた遊底を閉じる。安全装置を掛け、そのライフルをスリングを使っ

て右肩から吊った。
馬から降り、自分が乗っていた馬と荷馬をドワーフ・ウィローにつないだジミーがスキャバードから抜いた口径7ミリ・レミントン・マグナムのライフルを右肩から吊った。フィルムの空き缶に入れてあった噛みタバコを上側の歯茎と頬の内側のあいだに一とつまみ押しこむ。
「タバコを吸ってもいいかな？」
高見沢はジミーに許可を頼んだ。
「いいとも」
ジミーは噛みタバコの茶色い唾を雪の上に吐いた。
高見沢はダウン・ジャケットのジッパーを軽く引きさげた。ペンドルトンのウール・ウェスターン・シャツの左の胸ポケットから「エクスポートA」のシガレットの箱と使い捨てライターを取りだした。タバコを深々と吸う。
高見沢がタバコを吸い終ると、ジミーが、
「さあ、出発だ」
と、言う。
「ちょっと待ってくれ」
高見沢はライフルとバック・パックを降ろした。ダウン・オーヴァー・パンツを脱いでバック・パックのなかに突っこみ、再びバック・パックをかついだ。ライフルを再び右肩から吊る。腰のケースから取出した、曇らないレンズの「ノン・フォッギーII」のグラスを掛ける。レンズの色はグリーンを択んだ。
ディックを先頭にして、そのあとにジミー、しんがりに高見沢という一行は雪をかぶった岩場を足を使って登りはじめた。しばしばスリップしそうになる。
きつい登りなので、高見沢の体は熱くなる。時々、ウール・キャップを脱ぐと、頭から湯気が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb